



関東地方での地震続発、東北沖でも

2026年6月26日、千葉県や山梨県東部を震源とする地震が発生し、関東地方をはじめ広い範囲で強い揺れが2度観測されました。

千葉県を震源とした地震

26日12時46分頃に千葉県北東部でM5.8(最大震度4)を観測する地震が発生しました。ちなみに27日早朝にも北西部でごく微小な地震が発生していました。

千葉県(関東地方南部)の地下には、陸のプレートの下にフィリピン海プレートが南から、さらにその下に太平洋プレートが北東から沈み込んでいます。千葉県北東部(深さ約50km)の地震は、これらの境界域で発生しました。

山梨県東部・富士五湖の地震

26日22時28分頃、マグニチュード(M)5.6、山梨県富士河口湖町で最大震度6弱を観測する地震が発生しました。

この地震はフィリピン海プレートと陸のプレート(北米プレート)の衝突領域で発生したようです。

また、北西—南東方向に圧力軸を持つ「逆断層型」(岩盤が押し合って上下にずれるタイプ)の地震でした。伊豆半島を乗せたフィリピン海プレートが南から北上し、陸のプレートに激しく衝突している領域の先端部(深さ約20km)で発生しました。

次の図は21日から27日の1週間に観測されたすべての地震です。



図中の丸はすべて地震を示しています。色の違いは山梨県東部の地震(オレンジ色)が比較的浅く(深さ20km付近)、千葉県の地震(黄色)がそれより深い(深さ50km付近)事を示しています。

山梨県東部・富士五湖周辺は、南から北上してくるフィリピン海プレートが陸のプレートに衝突する境界付近にあたり、古くから浅い直下型地震が多発する「地震の巣」として知られています。1970年以降



の「山梨県東部・富士五湖」を震源とするマグニチュード(M)5.0以上の主な地震をリストアップしてみました。この地域ではM5クラスの地震が数年から十数年の周期で定期的に発生していた事が知られています。

1971年7月23日:M5.3

1976年6月16日:M5.5

1983年8月8日:M6.0(山梨県東部地震)

この地域における1970年以降で最大の地震です。大月市を中心に被害が出たほか、神奈川県の大月山地で落石による死者が1名発生。

1984年2月14日:M5.4

1988年9月5日:M5.6

1996年3月6日:M5.5

大月市などで最大震度5(当時の旧震度階級)を観測。負傷者が出たほか、一部損壊などの住宅被害や断水が発生。

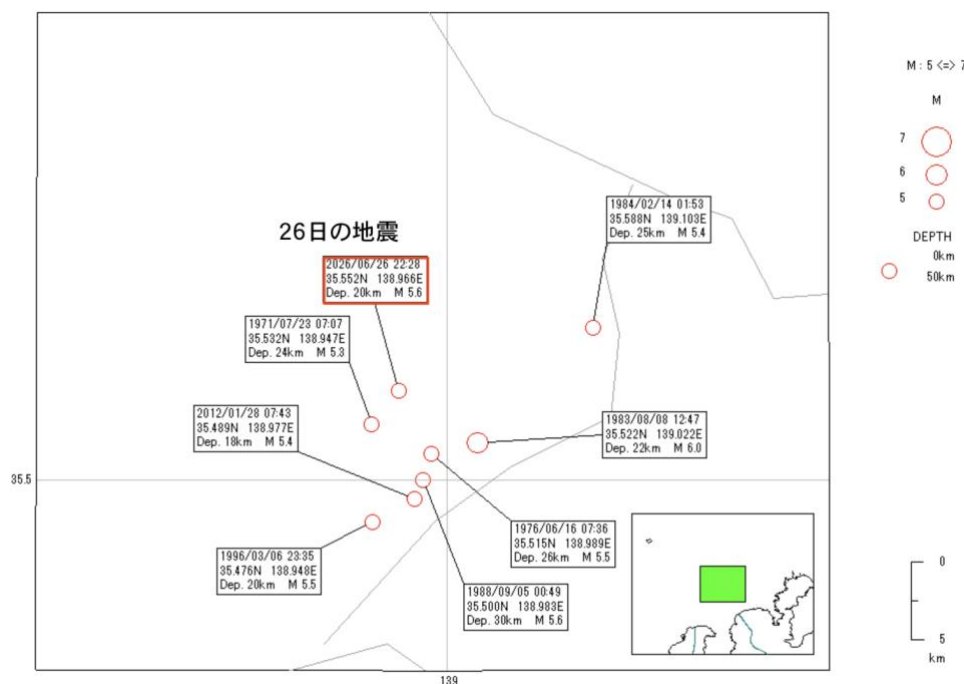
2012年1月28日:M5.4

富士河口湖町や大月市、都留市などで最大震度5弱を観測。このときは本震の約20分前にM4.6の前震が発生していた。

2026年6月26日:M5.6(今回の地震)

富士河口湖町で最大震度6弱を観測。

次の図は上記の8個の地震の位置関係を示したものです。



この地域の地震の特徴として、数日のうちにM5クラスが連発することが多いようです。1970年より前のデータも含めると、1931年や1955年などには、数日の間にM5～M6クラスの地震が2～3回続けて発生した履歴もあります。



今回の M5.6 の地震の後も、しばらくは同規模、あるいは一回り大きな地震が続けて揺らす可能性があるため、この地域の地震活動の特性として警戒が必要かと思います。

2つの地震にお互い関係はあるのか？

結論から言うと、「直接的な因果関係(一方がもう一方を直接誘発した)はありません」というのが地震学での一般的な見解です。つまり山梨県東部と千葉県とは直線距離で 100km 以上離れており、それぞれ異なるプレートの境界や局所的なひずみによって発生しています。

ただし、間接的な意味での“共通点”はあります。どちらも「フィリピン海プレートの運動(南側からの強い沈み込み)」が根本的な原因となって地下にひずみが蓄積し発生した地震です。日本列島(特に関東周辺)の地殻が、大きなプレートの動きによって常にストレスを受けている中で、それぞれ独立して限界を迎えた場所が動いたと捉えるのが自然です。

防災上の留意点

山梨県の震度 6 弱を観測した地域などでは、台風の影響もあり、地盤が緩んでいる可能性があります。また、そのため通常よりも少ない雨で土砂災害が発生しやすくなっている恐れがあります。

気象庁からは「発生から 1 週間程度は同規模の地震に注意が必要」との呼びかけが出ています。倒れかけた家具の固定や、崖崩れの恐れがある危険な場所には近づかないなど、引き続き身の安全に十分ご注意ください。

北海道および九州の地下天気図®

今週号では5月18日のニュースレターに引き続き、北海道と九州および南西諸島を含む領域の6月27日時点の地下天気図をお示しします。いずれも L タイプとなっています。

北海道の解析では、北海道西方海域での静穏化がさらに進んだ点です。この地域では、1993年7月12日に北海道南西沖地震(M7.8)が発生しています。この地震で奥尻島は津波により大きな被害を受けました。

また青森県東方沖(北海道南方沖)の地域は、昨年12月の北海道・三陸沖後発地震注意情報発令の根拠となった地震以降、地震活動が活発化しており、6月25日朝のマグニチュード 6.9(速報値)の地震や6月28日早朝に発生した地震(M6.1)は12月8日の地震活動の余震活動と考えられる地震です。青森沖では、1994年12月に三陸はるか沖地震(M7.8)が発生しており、この地域で再び規模の大きな(津波を伴う)地震発生の可能性がかなり高くなっています。

九州広域の解析では、長崎県・熊本県西方沖で地震活動静穏化の領域(図中で青い領域)が広がっている事がわかります。宮崎県沖の地震活動活発化領域は2024年8月の南海トラフ臨時情報発令の根拠となった地震以降、活発化の異常が継続しています。

この所の日本列島は、全国的にかなり地震活動が活発な状態が続いていると判断しています。

